

森の生き物

鳶の森は年間を通じて多様な動植物であふれかえっています。以下は、この地域に生息する多種の植物と動物の一部です。（名前は英語、日本語、学名の順に記載されています）

鳥

キビタキ (*kibitaki*; *Ficedula narcissina*)

このヒタキの一種は、春から初夏にかけて繁殖のために東南アジアから渡ってきます。キビタキは空洞のできた木々の高い部分や古いキツツキの巣に巣をつくります。オスは頭部が黒く、喉から胸にかけては鮮やかな黄色です。キビタキは、枝の先端から飛んできて空中の虫を採り、また同じ場所に飛んで戻るという行動を繰り返すことから、比較的簡単に見つけることができます。繁殖期のオスは格別美しくさえずります。

センダイムシクイ (*Sendai mushikui*; *Phylloscopus coronatus*)

はるばるインドからやってくる渡り鳥、センダイムシクイは、山の標高の低い場所に広がる落葉広葉樹林を好みます。体長 12.5cm と小柄で、背中が暗緑色、腹側は灰白色です。虫を餌とし、見つけるのはとても難しいものの、大きな鳴き声を頼りにその居場所を知ることができます。

カケス (*kakesu*; *Garrulus glandarius*)

翼に青い縞模様と目の周りに黒い斑があるカケスは、森の中でひととき目立ちます。虫や他の鳥の卵とヒナを捕食しますが、秋がやってくるとドングリに食指を向けます（地面の枯葉の下に蓄えます）。春と秋に特に大きな鳴き声で鳴くカケスは、猛禽類を含む多くの鳥の鳴き声を模倣できることで知られており、猫や人間の声も真似られるという人もいます。

オシドリ (*oshidori*; *Aix galericulata*)

オシドリは淡水の近くの木が多い地域を好むので、鳶の沼は理想的な生息地です。この水鳥は多くの場所で見かけられ、特に鳶沼、長沼、菅沼、瓢箪沼でよく目にされます。森の中でつがいを見つけ、繁殖し、木の幹の空洞に巣を作ります。オスの鮮やかな色はメスの地味な色と対照的で、特に求愛の時期にオスが胸を膨らませるとその対照が際立ちます。オシドリは植物やブナの実などの種子、昆虫、小魚を食べます。

哺乳動物

カモシカ (*kamoshika*; *Capricornis crispus*)

日本語の名前にシカが入っているものの、実は牛の仲間の偶蹄類で長毛のヤギ羚羊であるカモシカは、国の特別天然記念物に指定されています。かつては絶滅の危機に瀕していましたが、今では個体数は安定しています。成体でも体高が 1メートルに満たないカモシカは、人間を恐れず、その場で静かにこちらを見つめてきます。森の中で何かに見られていると感じたら、あたりを見渡してみればカモシカがいるかもしれません。

両生類

モリアオガエル (*moriaogaeru*; *Zhangixalus arboreus*)

モリアオガエルは成体になると森の中で生活しますが、水面の上に張り出した木の枝の上で交尾し、そこに泡状の物質に包まれた卵を産みつけます。孵化したオタマジャクシはその泡から出てきて水に落ち、そこで成長した後、森へと移動します。モリアオガエルの白い卵の塊は、瓢箪沼の上に突き出している枝で特によく見られます。

昆虫

エゾハルゼミ (*ezoharuzemi*; *Terpnosia nigricosta*)

黄褐色の体を持ち、頭部と胸部はやや緑がかった色をしているこの小さなセミは、日本の寒冷な地域の広葉樹林、特にブナ林に生息します。夏の後半に姿を見せるセミとは異なり、エゾハルゼミは春の 5 月から 6 月にかけて見られます。このセミが一斉に鳴く声は、鳥の鳴き声よりも大きいと言われています。雨が降る直前に鳴き止み、天候が回復すると再び鳴き始めます。

魚

イワナ (*iwana*; *Salvelinus leucomaenis*)

この淡水魚は褐色と灰色の体に白い斑点があります。水草や昆虫、小魚、さらにはカエルやサンショウウオなどを餌とし、成魚は 20cm 以上の大きさになります。サケの仲間ですが、イワナは川をのぼりません。冷たい水を好み、日本では「溪流の王」と呼ばれることもあります。鳶の沼でイワナを目にするのは稀です。見かける可能性が最も高い場所は、鳶沼のデッキ、鏡沼の近くの小さな橋、月沼から流れる小川、そして瓢箪沼と菅沼の間の小川です。

植物

キクザキイチゲ (*kikuzaki-ichige*; *Anemone pseudoaltaica*)

この多年草の野草は、菊に似ていることからその和名がつけられました。春、落葉樹林の林冠が林床への日光を遮る前に、白色～紫色の花を咲かせます。湿った土壌を好み、高さ 30cm まで成長します。

キノコ

ツキヨダケ (*tsukiyotake*; *Omphalotus japonicus*)

この山に生えるキノコは初夏から秋にかけて姿を現し、倒木したブナの幹に発生しているのが最もよく見られます。色はオレンジ色から濃褐色または紫がかった褐色まで幅広く、直径 25cm まで成長します。発光性があることで知られるこのキノコは、暗いところでほのかな緑色に光ります。人気のあるヒラタケに似ていることから、日本ではツキヨダケの食中毒が他のどのキノコより多く報告されています。

[コラム]

森の生存戦略

折られない

ハイヌガヤ(*haiinugaya*; *Cephalotaxus harringtonii*)は針のような葉を持つ丈の低い常緑樹です。ハイヌガヤは落葉樹がほとんどである蔦の森でよく見られる唯一の針葉樹です。幹が非常に柔軟なため、冬の雪の重みで折れるのではなく、しなることによって生き延びることができます。秋になって落葉樹の葉が全て落ちると、ところどころに生えているこの木の鮮やかな緑がとりわけ目立ちます。

天に向かって伸びる

ヤマブドウ (*yamabudo*; *Vitis coignetiae*) とサルナシ (*sarunashi*; *Actinidia arguta*) は、森の全域で見られる 2 種のつる植物です。これらは成長が早く、林冠の上の日光を浴びるために木の幹に絡まって上に伸びます。mountain grape という意味の和名を持つヤマブドウは古くから食用や薬用にされており、つる自体もしばしば籠を編むのに使われます。